

「関心のおもむくままに研究を進め、随分と間口を広げてしまった」と著者は最後に述べているが、ある時代ある文化における人間生活の営みの多様な側面が映し出されてくるものこそ、家族という存在である。今日、もはや学校という枠組みの中だけでは解決し得ない子ども・若者問題や教育問題を考えていく際に、家族史、法制史、社会教育史、文化史、女性史等の広い領域を視野に収めた本書から、読者は何らかの示唆や新たな視点を与えられるのではないだろうか。

なお、本書は第一次世界大戦後の新中間層を対象としたものだが、同時期の都市下層民に対する国家の家族秩序の維持戦略を社会事業に着目して明らかにした鈴木智道氏の論文(「戦間期日本における家族秩序の問題化と『家庭』の論理」『教育社会学研究』第60集, 1997年)とあわせて読むならば、国家による家族への介入問題が一層深く理解されるだろう。巻末の人名索引、事項索引、参考文献が整っており、その意味でも家庭成立史のよき案内書となっている。

(勁草書房刊 1999年10月発行 四六判 272頁
定価3,000円+税)

平尾 真智子 著『資料にみる日本看護教育史』

佐々木 享 (愛知大学短期大学部)

著者も指摘するように看護教育史研究は近代日本の教育史研究とりわけ職業教育史研究に欠落していた領域である。本書は、この未開の領域に踏み込んで基礎的資料を収録し、同時に近代日本の看護教育史を鳥瞰することを試みた恐らく最初の労作で、全174頁のうち解説には47頁を割き、資料に127頁が当てられている。本書の構成は、序章「なぜ、いま看護教育の歴史を問うか」、第1章「明治期における看護教育」、第2章「大正期・昭和前期における看護教育」、第3章「戦時体制下の看護教育」、第4章「第二次世界大戦後の看護教育」、第5章「現代の看護教育」、終章「看護教育の歴史から学ぶ」からなり、「看護婦養成を中心に」(2頁)それぞれの時期(章)の冒頭に若干の解説を述べ、各章ごとにその教育の制度と教育内容に関する基礎的、基本的な資料を収録したものである。ここに至るまでの著者多年の労を多としたい。

本書の若干の特色に注目してみる。まず、看護教育成立の経過に関する資料を収録するに当たり、ナイチンゲールから説きおこす巷間の俗説に組みせず、近代日本における揺籃期の看護教育を近代的な医療制度や陸軍の看護教育の制度化など事実とそくして説き起

している。読者はこうして本書により近代日本における看護教育の濫觴を知り得る。ここには、事実とそくして歴史を探求しようとする著者の冷静な姿勢がかいまみられる。

各種医療機関による看護婦養成から始まり、各府県の看護婦規則制定とその下での看護婦養成の段階を経て、1915年の内務省令による「看護婦規則」の制定が看護婦制度の面ばかりでなく、看護教育の制度化を促進する画期となったこと、第二次大戦の困難な時期を経て戦後の「保健婦助産婦看護婦法」により看護婦が国家資格になったこと、戦後は同法による看護教育制度が成立し発展してきたこと、などを通して近代日本における看護教育の制度面の整備と発達を俯瞰できることは、本書の最も重要な特色の一つとなっている。

看護婦養成については、戦前にはいわゆる学校令に準拠した施設が極端に少なかったために養成施設自体に不明の点が多い。本書は日赤や大学附属をはじめ各地に叢生した各種の養成施設を丹念に拾い上げて、その養成の実態を解明している。著者の最も苦心した点の一つかと推測される。その際、教科書などそれら施設における看護教育(学習)の内容(の変遷)に関する資料を多数収録し、看護教育の内実の変遷・発達を追うことができるよう配慮していることは、本書の最も重要な特色となっており、ここに看護教育史研究に対する著者の確乎とした観点が示唆されているといえよう。

既存の学校体系図を収録することにとどまらず、学校制度と看護教育との関連に立ち入って考察して欲しかったこと、学校制度に関する記述にやや疎漏がみられるなど細かな点に関する希望は省略することとして、今後の研究の発展のために若干の注文を並べてみる。

著者の視野の広さは、巷間よく知られている日赤の従軍看護婦の他に陸軍には多数の「陸軍看護婦」が存在したことやその教育関係資料を収録していることにも示されている。しかしこのことをより正確に理解するためには、従軍看護婦を別として、長く女性を雇用しなかった陸軍が1919年の「衛生部員代用雇員傭人採用規則」制定以来看護卒、看護長に代わる看護婦、看護婦長を雇い始めたこと、陸軍自身が看護婦養成を始めた経過などを知ることがもとめられる。ちなみにいえば、旧陸軍は看護卒・看護長などの教育訓練については「看護卒、磨工卒、補助看護卒、及衛生部下士候補者教育規則」のような詳細な規則を整備しており、その教育のための教科書を整備する努力をしていた。(なお評者はこれら旧陸軍の看護教育の歴史については高野邦夫会員の教示に負っている。)本書にこの種の事実に関する資料が欠落しているのは、圧倒的多数の

看護職を占めたのは女性であった事実に基づいて「看護婦養成を中心に」したためであろうかと思われるが、だとすると看護史を看護婦養成中心と限定することの是非が改めて問題になる。同時にここには戦後日本の教育学における軍事教育史研究の欠落が反映しているともいえる。

看護職は女性に限られていたわけではなく、男性看護人が古くから存在したことを著者は知っているにもかかわらず、残念なことに本書には男性の看護人の存在やその養成に関する資料は収録されていない。これも「看護婦養成を中心に」したためだというのであれば、この面でも看護教育史を看護婦養成に限定することの可否が問われるのではないか。また、現代日本の看護（教育）制度における最も重要な問題領域の一つとなっている准看護婦の特質とその養成の教育内容に関する資料が欠如していることは惜しまれる。

(看護の科学社刊 1999年11月発行 B5判 174頁 定価3,000円)

山中 恒・山中 典子 著『間違いだらけの少年H
——銃後生活史の研究と手引き』

逸見 勝亮 (北海道大学)

1 『間違いだらけの少年H』は、妹尾河童『少年H』（講談社、初版は1997年）——僕は錯綜する時制に閉口して途中で放り出したが——の上巻を批判し、かつ「銃後生活史」を鮮明に描いた好著である。

2 山中氏達が指摘した事実の誤りを一例だけあげる。妹尾氏は、1941年4月の始業式の翌日に国民学校1年生の教科書を見せてもらい、「本当にアカイ、アカイ、アサヒ、アサヒ、と書いてあり、その頁の絵は色刷りで、朝日に向かって四人の子どもが手を挙げている後ろ姿と、その横に一匹の犬がしゃがんでいた」（『少年H』上巻、203頁）と記す。「後ろ姿」以下の文章の不備を今は問わない。山中氏達は、少年Hが国民学校初等科第1学年国語教科書『ヨミカタ』一を見たのであれば、その挿絵は「五人（男三人女二人）の子どもが両手または片手を挙げている後ろ姿と、白い一匹の犬」でなければならないと指摘する（308頁）。妹尾氏が子どもを4人としたのは、『昭和二万日の全記録』第6巻（講談社編・発行、1990年、52頁）所載の『ヨミカタ』一（6・7頁）のモノクロ写真を見て「早とちり」したのであり、1941年に教科書を見たというのは嘘だとも断ずる。なるほど、この写真からは、ノドの部分に描かれたものがあるが、子どもは4人としか確

認できない。ところが、山中氏達が指摘しているように、『昭和二万日の全記録』第6巻は、冒頭に「ヨミカタ」一と同じ箇所のカラ写真を見せていて、そこには5人の子どもが描かれているのである。妹尾氏は「書いたことの実事確認は全部とるようにした」（妹尾河童・野坂昭如『少年Hと少年A』PHP、1998年、126頁）とまで言うが、記憶が誤っていたか、事実確認を怠ったために生じた誤りである。なお、文庫版『少年H』上巻（256頁）では子どもは5人としてある。

3 敗戦後に知った事柄を戦時下のこととしている、と山中氏達が指摘した例をあげる。少年Hは、1940年8月に父親から「この間」衆議院で斎藤隆夫が「戦争は国の力と力の衝突だ。それを『聖戦』だというのは誤魔化しの嘘である」と演説して議会から除名されたと聞いたと記す（『少年H』上巻、165頁）。山中氏達は、斎藤隆夫の演説内容が人々に明らかとなったのは1955年であり、父親がこのように話すはずがない、これも『昭和二万日の全記録』第5巻（1989年、234・235頁）の受け売りだと批判する（70～75頁）。1940年2月3日付『東京朝日新聞』（縮刷版）は、2月2日の衆議院本会議で「聖戦の目的につき批判的意見を述べた部分が今次事変の目的と理想を侮辱したものであるとして陸軍をはじめ各派にも重大な衝撃を与へ」と報じた。軍部の専横を伝えてはいるが、当時知り得たのはこの程度であった。妹尾氏の意図は、有名な斎藤隆夫演説にことよせて、読者に「あの頃の一つ一つの出来事に、僕には……違和感と抵抗感があったから覚えていた」（『少年Hと少年A』126頁）と思わせることにある。妹尾氏は「後から知った知識は入れないようにしようと思った」（『同上』125頁）と述べているにもかかわらず、読者を引き込むために時制と情報を操作したのである。

4 妹尾氏が「自分を人ごととして本当の事を書けばいいんですよ」（立花隆）、「少年の頃見ていたことをそのまま書いてほしい」（澤地久枝）との勧めに応じて書いた（『同上』124頁）という以上、『少年H』に書いたのは「本当の事」か、「見ていたことをそのまま」書いたのか、という責めを負うのは当然である。山中氏達は、少なからぬ人々が『少年H』にたいして懐いた違和感を、資料を対置しながら確かめる労を厭わなかった。それゆえに「銃後生活史の研究と手引き」たり得る1巻は成ったのである。『間違いだらけの少年H』は、『少年H』上巻における事実の誤りと時制の混乱・行為に正面から挑んだ敬服すべき著作である。

5 僕は『間違いだらけの少年H』と『少年H』を読み比べながら、かつて読んだ大岡昇平の『レイテ戦記』を、回想・記憶と文学との格闘の例として想起し、亀